
弓の軌跡、孤独な狗

平久左衛門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弓の軌跡、孤独な狗

【Nコード】

N28400

【作者名】

平久左衛門

【あらすじ】

常に孤独なモノは、孤独であることを知らなかった。

他者の幸福を願うモノは、己の幸福を願えなかった。

張り詰めた弓、その矢が放たれば只突き進むのみ。残滓も残さず、手応えを知るのは己のみ。

だが、その傍に居る者には見える。確かな軌跡を
最早戻れない青年の後ろ姿を見ながら、孤独故に孤独を知らなかつ

た少年は、何時しか追いかけるように走っていた

弓兵と狗、二人が出逢い物語は綴られて行く。

ヒトに在らざるモノ（前書き）

有り体に云って、よくあるf a t e xネギまのクロスモノ。

二年くらい前に書いて放置していたものを掘り起こしました。

書いてて「こりゃダメだ」と思い封印してましたが、なんか急に勿体無くなったので放出。

あんまり長い話にはなりません。

あ、あとB Lじゃないんでそっち期待しないでくださいあ。

ヒトに在らざるモノ

犬上小太郎は、狗族と人の間に産まれた。

それは決して生誕を祝福されていない、望まざる生。

人とも違い、狗族からも忌み嫌われ

気が付けば常に独り。それが寂しいかと問われれば『それが普通』と答える。そもそも、他者との触れ合いが無かったモノに、『寂しさ』を理解させるのは困難ではある。

だから『普通』。それ以上でもそれ以下でもない。

独りで生きて行くには、力が必要だった。己を庇護してくれる存在が無い以上、力が必要であり、少なくとも小太郎には絶対的な信望が『力』にあった。

強くなることを生きる道標とするまでに、幼い自分は力以外に信望するモノを持たなかった。

それは7つ歳を数えた日 いや、本当に生まれから7つ正確に数えたかも解らない。何せ 俺 を産んだ親すら今何処に居るかわからない。

そんな 俺 が自分の生誕を正しく覚えているとは言い難い。

だが、そんなこともどうでもよくなった。何の事はない。己の力及ばず、ここで果てるからだ。

『なんや、むっちゃ悔しいわ』

この期に及んでもまだ、力が足りなかったことを悔やむ 俺 。
深い森、月明かりの薄い光に照らされた 異形 。形容するなら鬼 。

数は5、小太郎からしたら見上げるどころか、少し離れないと顔すら見れない身長差。

「坊主、お前えさんもなかなかやるようだが、儂らにや及ばんかったなあ」

一匹の鬼が、喜色に染まった顔でそんな賛辞を贈る。

『ぬかせ……』

賛辞に軽口で返そうにも、心で紡いだ言葉は口を出なかった。そんな力もない。狗族としての獣化能力を出し切ったが、それでもいいようにやられた。

『あー、俺死ぬんかな』

このまま眠気に吞まれて、それこそ眠るように死ぬのも

『ふざけんなや！ そんなんあつさり死ねるか！』

そう自分を奮い発たせ、鬼を睨んだ時……風を切る様な鋭い音と、鈍い刺突音が聞こえ

「『なっ！？』」

辺りの4匹の鬼と、俺の驚愕の声を残し、目の前に居た鬼が消えた。

その数瞬後に、先程消えた鬼が居た場所に新たな人影が降り立つ。

『人影……やて！？』

そう、それは『人』にしか見えない。こちらに赤い背を向けた人影。長身で白髪。その背は一振りの剣を想わせた。

「ふむ。たった一人の子供相手に、随分と大人気無いものだな」
赤い人影が声を発する。背中しか見えなかったが、男だとそれで確信した。

「せやかて、儂らも仕事違うたらこんなせんわい。

『やれ』言われたら『やる』しかねえんや。それが喚ばれた儂らの勤めや」

言うなり右側に居た鬼が赤い男に襲い掛かる。横薙に払われた野太刀は、硬く高い金属がぶつかり合う打撃音と共に途中で止まる。

「けつたいな術やの。にいちゃん、どっから出した？」

右手に握られた亀甲紋の黒い中華刀。

『なんや！？ さっきまで何も持ってへんかったんに』

良く見ると左手にも白い黒い中華刀に似た剣が握られていた。

左手の剣で野太刀を振るった鬼を『還す』と、振り向き様に正面の2匹と左の1匹に向かって剣を投げる。

それを隙と見た左の鬼が錫杖のようなモノで襲い掛かかり「なっ!？」

先程の焼き回しの様に 全く同じ双剣で 攻撃を防がれる。違ったのはその後

「あがあっ!？」

唐突に『還る』。消えた鬼の 背中が在った 場所に投げた剣。

すると正面左寄りの鬼も同様に還り

再び双剣を残った一匹の両脇に向かって投げた。

最初に投げた一組を手にとると、そのまま残る一匹へ走る。

「なんなんや!？ 何本持つてん !？」

交差する二刀を鉄棒で受け止め、疑問を投げ掛けるが……言いかけながら背面から同じように交差する二刀によって『還った』。

『 って、一撃で鬼を還す刀ってどんなやねん！』

しかも、何時の間にか消えとるし!』

疲労と負傷で気が付かなかったが、手放した剣が刺さるだけで鬼を還すなら、それはどれだけの魔力を持つのか。

気や魔力で強化するなら 小太郎が知りうる限りだが 手元になれば、少なくとも投げて戻るまでの時間は強化出来ず、ましてや効率が悪すぎる。

となれば、剣自体が魔力を内包している可能性。唐突な現れ、唐突に消えたからアーティファクトの可能性が高い。

「立てるか？」

思考している間に男は膝を付き、手を差し延べる。

これが孤独な二人の出会いだった

ヒトに在らざるモノ（後書き）

短いね、ホント。

それに需要無いですね。組み合わせ的に。

兄、弟

「小太郎、ここにその魔法使いが居るのかね？」

3日前にぶつ倒れた俺を介抱して、野宿しながら俺とこの兄ちゃんはお互いの事を話し合った。

なんでもこの兄ちゃん、宝石の 忘れてもた。まあ、よー分かんけど、兄ちゃんも分からんらしいからええか。

名前は衛宮士郎やったか。日本人みたいな名前の癖に日本人に見えるへんわ。

そついや、野宿なんにただの焼き魚が美味かったわ。変な葉っぱとか変な茎みたいないと、一緒に焼いたりすり潰して乗っけたり。で、俺らが居るのは 仕事の依頼 しとつた西洋魔法使いが居る変なん家や。

「……どうでも良いが、『変な』が無駄に多いぞ、小太郎」

しゃーないやん。変ななを『変な』ってゆーて、何が変なんか。

それに俺、兄ちゃんみたいな大人ちゃうねん。難しく言葉知らんわ！それよか早よ行くで。

「ちつ……」

お帰り、生きてたのかい」

なんや！ 『ちつ』ってなんや！

絶対コイツ俺こと見捨てたわ！

「抑えろ、小太郎。このような道理も知らん陰湿な腐れ外道に敵意を向けたところで器が知れるだけだ。

ところで陰険腐れ外道よ、貴様が依頼した件は小太郎が達成した様だが、報酬はないのかね？」

依頼言っんは、何やらヘンテコな短い剣を変なん所から盗むから追っ手の足止めしろ やと。

「達成？ 達成だと！」

コイツがちゃんと足止めしないから、僕は大切な剣を」

そこまで言うて言葉が止まる。ビックリした顔しとんなー。俺も一緒やけどな。

「な、何故お前がコイツを持ってるんだ！」

「ふむ、やはりこの短刀がそうか。いや、何。途中で拾ったまでさ」

白々しい兄ちゃん。しかも妙にムカツク笑い方すんな、兄ちゃん。俺に向いてないだけマシやけどな。

「さて、これがある以上、依頼は達成された訳だが 貴様、小太郎は最初から捨て石だな？」

そんな俺かて最初から分かっとする。だから力で依頼達成すりやええんや。そうすりや文句なしや！

「小太郎……それは違うぞ。この陰険腐れ外道はな、『お前が死ぬことを前提に』依頼している。

死人に口無し、自身に足は付かず、報酬も払う必要性がない。仮に生き延びても 剣を落とした 以上、依頼は達成されない……とね」

なんやそれ！ ……ん？ ちよい待ち！

「その僕の 落としモノ をなんでお前が持ってるんだ！」

せや、この『いんげんなんちゃら』が落としたって、『隠した』んゆーことやる！

「たわけ、陰険腐れ外道。あのような結界なんぞお粗末過ぎて溜息も出ん。

貴様は二流にも劣る三流だな。陰険腐れ外道 ワカメ」

いんげん……ワカメ？ あーワカメやワカメ！ あの頭なんやえらく何か似とる思たんや。

「ワカメって言うな！ 断じて！ 僕は！ ワカメじゃない！！」

「さて、貴様は依頼料を払うのかね？ 払わん、と言うなら何、貴様のことを洗いざらい立法機関に話し、これは持ち主に返した上

でその報復活動を援助するだけだが。

ああ、安心したまえ、五体満足とは言わんが死にはしないようにしてやるう。罪状も増えるかも知れんが、死刑だけは回避するように調整してやる」

お、ワカメおもしろいわ。青い顔しとると、まんまワカメやな！。

「士郎の兄ちゃんやるな！。俺だけやったら金ふんどくれんかったわ。」

ワカメの所から報酬を 気持ち多め に貰^{もら}てきた。これで美味しいメシたらふく食えるわ。

「ふむ。仕事の後の食事は人生の潤いだ。だが、我々にはまだ一仕事残っているのだがね」

なんやねん、仕事で。

懐に手を入れた思たらなんか取り出す…って、なんでそれ持ってるねん！

さつきワカメに渡したはずの短刀がある。

「ああ、あれか？ あれはな、私が造った贋作……偽物だよ」

『壊れた幻想』

なんか呟いた瞬間、ワカメの居る方から悲鳴が聞こえた。なんや？ 何したんや！？

「何、もう用済みなので消した……いや、 自壊させた のさ。

剣に内包された魔力を撒き散らしながら、な」

ほへえ、ほんまおもしろいな、兄ちゃん。

しっかし、めっちゃ腹減ったで兄ちゃん。早メシ行こうな。

「……話を聞いていたのかね？ 言っただけだ、一仕事残っている」と。

祝杯は任務完遂を以って、だ」

任務なんて難しい言葉は無しや！

男なら 完全勝利 ！ これやで！

「クッ……… 違うない。 ああ、 そうだな。 行こうか、 小太郎。 俺達の完全勝利 に」

まだ幼い少年は、 赤い青年と邂逅する。 本来なら有り得ない奇跡は、 もう一つの可能性への軌跡を

兄、弟（後書き）

先生ー、短いし潤い（おんなのこ）成分が欠片ありませんー。

ハイ、お粗末様でした。

出す時期も違えば、需要おんなのこも無いですね。

そんな塵紙にも劣るモノを掘り起こした理由は……特にありません。
やはり敢えて言うなら「勿体無いから」でしょうね。

当時（二年前）はこの手のクロスモノって、だいたいが癒し（おんなのこ）に満ち溢れてたのに、そんな中流れに逆らって書いてた私は一体……

まあ、今後もおんなのこ（萌え）が絡むことは無いので、皆様を失望させ続けますよ！

弓、狗

小太郎と云う少年はその特殊な生まれから、普通の少年たちのような生活は出来なかった。

だが、それでも不幸だとは少しも感じていない。そして、捻くれてもいなかった。

庇護も保護もされていない。だからと言って放置もされてはいない。

衛宮士郎と名乗る保護者のような存在は居たが、環境から自立心が非常に強い小太郎故に、必要以上の庇護はしなかった。

だが、至らぬ幼い子供が道を逸れぬように、決して曲がらぬように鍛えた。それは教育者と呼ぶのが相応しい。

憐れみを持たず、生まれの歪つさを否定せず、忌避することもない。自然体で小太郎に接する大人は士郎が初めてだった。

だから人とも化生とも違う自己を認識しながら、折れず曲がらず10を数えるまでの3年間を生きて来れた。

実は小太郎と士郎は『裏』ではそれなりに有名になりつつあった。幼いながらに卓越した戦闘力を持つ小太郎と、『謎』の赤い弓兵仕事名『アーチャー』のコンビは日本ではそこそこに名が知れてきたのだ。

士郎は仕事名と真名をはっきり分けたが、小太郎は分けるつもりは無かった。士郎は『過去』の苦い経験から、己の情報を極力曝さない為に。小太郎は己を誇示することに危機感が無い故に。

そんな小太郎に士郎は眉を寄せたが、『小太郎の親類が見付けるかも知れない』

などと、何処か今だに人を信じる甘さが抜けない思考をしていた。

『弓狗兄弟』等と呼ばれているが、兩人其他人の評価を気にしない性格から、二人で依頼を受けた場合は専らこの呼称だ。

そして、春先に小太郎が依頼を受けてきた。放任主義ではないが、

依頼を受けるも撥ねるも小太郎の自由にさせている。フォローするのもサポートするのも自身の役目であり、妥協はしない辺り寧ろ親馬鹿に近いモノがある。

そんな士郎だが、今回は依頼自体に難色を示す。

「小太郎……お前、ちゃんと依頼見たのか？」

「おう！　ちゃんと見たで、西洋者と闘り合う　んやろ？」

その答えに、頭部を襲う幻痛を覚える。

確かに、依頼の一点は『西洋魔法使い共に復讐する為に力を貸して欲しい』となるが、内容はそんな単純なモノでも無い。

関東魔法協会の理事長の孫娘を拉致、生贄にして太古の鬼神を復活。それが内容であり、依頼の通り『復讐する為に力を貸す』事になる。

決して『西洋者と闘り合う』ことが内容ではない。

生まれや是迄の環境から『力』に対して偏執を持っているのは理解している。そして、それ故に力を誇示し、ぶつけ合う事にある種の喜びを見出だす　端的に言えばバトルジャンキーであった。

今回の依頼も『復讐』闘う』と直結し、細かい内容など見ていないに違いない。普段なら、弱者に態々手を上げるような真似はせず、人さらいの類いは請けない。戦闘者としてのプライドと、生まれの境遇から覚悟もない者や女子供　意味合い的には一緒だが　には手を出さない。

『くっ……暗に戦闘を匂わす依頼をしてからに……』

憾むぞ、依頼主』

そして、事が済んだら小太郎に　教育的指導　を施すことを心に決めた。

麻帆良学園都市

日本は関東にある、魔法使い達の拠点『関東魔法協会』であり、有数の巨大な　正に『学園都市』と呼ぶに相応しい場所。

その一角に女子中等部があり、学園長室と書かれたプレートの部屋に幾人が居た。

時は陽を隠し、帳を落とした闇の中。

陽に隠れていた『在る筈が無い』とされている存在もまた、闇の色に紛れて行動を開始するものだ。

それらは一様に『魔』を冠する存在。偽りの生を持つもの、人を喰う闇の眷族達。そして、人の身ながら『魔』を用いる術を見出だした者達……

則ち、『魔法使い』と呼ばれる者達もまた、その闇色に染まる時間をフィールドにしていた。

そんな闇が外を占めているなか、この学園長室に居る4人は全て、『魔』を知り、『魔』を冠する者達だった。

一人は老人で、一人は青年。残り二人は女性。

好々爺とした異常に後頭部が突き出した老人は学園長と呼ばれ、この学園都市の長にして、『関東魔法協会』の理事長だった。その学園長が言葉を発する。

「婿殿から連絡があつての。何やら関西では水面下で不穏な動きがあるらしい。

そして、タカミチ君。君は聞いたことがあるかも知れんが……『弓狗』もまた関西じゃ」

タカミチと呼ばれた眼鏡の青年は、『弓狗』の言葉に苦い顔をした。脇に控える褐色の肌をした、長い黒髪の少女は顔に出さなかったが、僅かながら反応がある。

肩くらいの黒髪を、左頭部に一房に纏めた小柄な女性。容姿も年齢的にも少女。は、他の者と違い関西に最も縁を持つが、その名を知らない。故に問う。

「学園長、その『弓狗』とは？」

「うむ。ここ2、3年『裏』で名前が知られてきた二人組でな、『弓狗兄弟』と呼ばれたりしとる。

片方は10かそこらの少年での。年齢に見合わぬ卓越した近接戦

闘技術を持つそうじゃ。

そして、もう一人なんじゃが……」

学園長は「うーむ」などと唸りながら、続きを口にしない。
やっとの思いで口にしたのは

「……いや、のう。さっぱり分からぬでな」

そんな言葉だ。

小柄な少女　刹那　は思いきって聞いてみた。

「分からない……とは？」

おかしいのだ。有名になりつつあり、高畑先生や龍宮　褐色の
女性　は名前を知っているようだった。

なら、少なからず情報があるはず。

「うん。確かに情報はあるんだ。

……だけど、彼　ああ、男らしいんだけど。その彼が戦う姿を、
もつと言えば『戦闘方法』に関する情報が極端に少ないんだ」

見兼ねたのか、高畑先生が代わりに説明する。続けて龍宮が「な
んでも私のような褐色の肌で、髪は白、長身で赤い外套を羽織った
男らしい」と、その外見特徴を付け足す。

「なんでも、弓を使うらしくてね。仕事名も『アーチャー』なん
て名前なんだ。

……確かに、負傷したり……その、『殺された』人には『矢らし
きモノが刺さった形跡がある』って言うのさ」

濁すように『殺された』と言うが……そうか、人を殺したりもし
てるのか。しかし、違和感がある。確かに負傷や殺害に使われた
凶器は納得した。だが、弓矢とはまた古風だし、剣や槍などの近代
からみたら同じ様な古い武器に比べて、大分隠密性はあるがそれで
も目標が見える位置から射る以上、全く情報が無いのはおかしい。

それに変だ。『刺さった形跡がある』……と言うことは、『

凶器の痕しか無い』と言うことではないか？

凶器を回収に来た？

凶器が霧散した？

「うん。刹那君が思ってる通りさ。弓兵を名乗り、実際に矢が当たった形跡があつての話だからね。

ただ、『その様な痕があつた』と言う謎しか残らない。回収したなら何時？ 霧散したならどうやって？

それがはつきりしない。

傷痕からも細い剣を刺したような感じもないし、傷口の形状とかを解剖しても矢らしきもので間違いないらしいよ。少なくとも『細い鏃の付いた棒状の物』って言うから僕は矢で合つてると思うんだ」現代の捜査能力での結論なら、それに異論は無い。だが、やはり変だ。矢でないにしろ、少なからず『戦闘方法が不明』と言われる以上、姿を消して何かを刺すか、遠距離での狙撃か。

姿を消してと言っても、魔法使いが公にはされてないが居る以上、完全に隠密状態で接近するには無理がある。『有名になるくらい依頼を熟した』ならそれなりに何か探られてるはずだ。やられた瞬間全方位広域に『何か』する等の対策を練られたり。

だが、そういった話が無いなら『遠距離での狙撃』か？ それでも変だろう。銃などの火器と弓なら、銃の方が射程が長い。魔法と弓なら隠密性は弓だが、やはり射程は魔法になるだろう。

しかし、射程だけで見たら弓では有り得ず、だが捜査では矢らしき傷痕と結果が出る。

なら弓なのだろうが……弓で人に発見されずに『殺傷力が高い』威力が放てる距離から撃つ……

それはどんな魔法か。いや、魔法であつても銃の狙撃力に勝てない。銃の射程を最大に活かすなら場所が限られる筈だ。

「やっぱり、今までに狙われた人達は『銃での遠距離狙撃』を警戒したりしてたらしくてね。当然狙撃されそうな場所に人や機械を配置したり、狙撃場所を狭めるように考えてたみたいだね。距離は

人数的にも厳しいだろうけど、常識的には2kmもあれば十分だと考えての配置。

でも、配置した人は何も無かったって言うし、本当に謎さ。

さらにはね、魔法使いとかは障壁があるだろう？　そういった魔法使い達は更に酷い事になってたんだ……。

大砲でも直撃したかのように体が抜切れたり……障壁が在る分、力技で　障壁ごと　やられてたんだ」

それは

感情をあまり表に出さない龍宮ですら顔をしかめる。強固な障壁を貫通し、その結果が大砲の如き跡……

やはり濁してはいるが、一撃必殺　だったのだろう。

「ここでアーティファクトの謎が残る。複数のアーティファクトの所持だとしても、本国での登録標に謎の手掛かりになりそうなアーティファクトの種別は無かった。

威力、射程に一貫性が無いし。可能性として一番高いのは、実は全部ブラフで、本当は弓兵でもなく、完璧なステルス状態での暗殺……　かな？

それも、障壁ごと　となると至近距離なら流石に何か判るものなんだけどね」

ああ、理解した。『わからない』と理解出来た。そんなのは魔法であれ何であれ、聞いたことも見たこともないし、伝承にも記されていないだろう。

理の外に在るモノと解する。些か言葉として間違っているが、つまりそうすることでその人物が存在する、と無理矢理に納得しなければ為らないと。

「と言うわけじゃ。アーチャーはその得体の知れ無さ故に、一部では忌み名。

だが、幸いにしてアーチャーに狙われた輩は皆、悪事を働くものばかりでの。忌み名と呼んではいるのはそういった輩のみじゃ」
だからと言って安心するべきではない。

寧ろ、得体が知れ無い以上、敵に回ればこれ恐怖感は較べようもない。どうにかこちらに引き入れるか

「妨害か消去…か。引き入れるのが一番だろうけど、『弓狗は関西に居る』って話したろ？ そのへんどうなんだい？」

黙っていた龍宮の問い。関西か……

「それじゃよ。少なくとも能力者じゃろうから、『魔法使いの関係者』の可能性は高い。問題は日本で、しかも関西でしか名前を聞かんでの。下手をすれば」

薙蛇を突きかねない、か。厄介な……

日本固有の魔法いとも言える『呪術士』は西洋魔法を嫌う者が多い。『大戦』と呼ばれた戦の傷痕からこういった軋轢は生まれたのだ。現に、この話しの発端も『関西水面下での不穏な動き』から来る。

もし、その動きに同調せずとも、似た思想だった場合

「危険だな。なんとかならないのかい？」

「うむ。明日からの 修学旅行 が京都じゃからの。一応『西の長からの依頼』として婿殿にアーチャーへ依頼して貰った。結果はまだじゃが」

そんな時、機械的な呼び鈴が鳴り響く

弓、狗（後書き）

…二人もおんなのことが出てますネ
でもね、たぶん出番はもう幽かにしか無いよ。残念。

もつと残念なのはダンディTTT。我々のタカミチ先生ですよ。出番が……

実はその手のスジには堪らないダンディグラスなオヤジ共が多いネギま。個人的には活躍させたいけど、まことに残念。

詠春が居るからいいか。原作じゃ良いヤムチャっぷりしてたし。ちよっとくらい出番多くてもいいっしょ？

弓、狗 2

士郎は小太郎が依頼に自分が乗らないことを伝えた。元々、全ての依頼を二人で熟している訳ではない。

難度の高い、又は効率の観点からコンビを組むだけだ。小太郎も自らの腕を確かめる意味もある為、逆に「来んでもええわ」などと言う。

そして、士郎は自らに宛てられた依頼に目を通す。関西呪術協会の長、近衛詠春からの依頼。

『ふむ。刀剣鑑定……とはな』

士郎自身に直接来る依頼は刀剣鑑定が主だ。真贋を見極め、刀剣の逸話すら瞬時に見極めることが可能な『解析魔術』のイカサマで、正確な鑑定は一部有名だった。

ただし、その出生すら謎の士郎が呼ばれるのは、あまり表に顔を曝したくない。云うなれば 真っ当ではない人種が大半だ。

それが日本でも有数な大組織の長から依頼が来た。しかも、『退魔』や『魔法』などの一般には決して曝せない類の 裏側 から。

だが、他の組織や個人とは違い、裏側 ではあるが、俗に云うヤクザ・暴力団・マフィア等とは対極にいる。裏での立法機関に近い存在だ。

そして厄介な事に、士郎には戸籍などの身分証明に必要な情報がない。何せ この世界の住人ですらない のだから……

つまり、関西呪術協会は士郎にとっては遭遇したくない組織と言えた。

『予想以上に早いな……いや、3年ももてば十分か』

相手から接触を図ってきた。それが裏であれ『正規の手順』であることからそう悪い話でもなさそうだ。

断言は出来ないが、拘束してどうこうすることはないのかもしれない。

それに今回の小太郎の依頼は少しかりか、多大に大組織の天秤を傾け兼ねない内容だが、それ以前の依頼は組織が出張るほどの害あるモノは無かった。

アウトローにありながら、その実割と『マトモ』な実績しかない。だからこそ、大組織の接触が予測より早いと感じたが、乱暴な接触でなければ対話の余地はあり　　なによりこちらからそれを拗らせる意味は全く無い。

幸い、今回の接触は『弓兵』宛てであり、既に小太郎は出払っている為、直接小太郎に危害が及ぶ可能性は低い。

『興に乗るのも一興か』

日本の住宅事情を無視したような、その広い和座敷に幾人かの人が居た。

衛宮士郎もその一人。正座にて対面するのはこの座敷のある、家屋　　その所有権を持つ大組織『関西呪術協会』の長だった。

他の者はその佇まいや雰囲気、得物らしき有無により術者と剣士が半々の計6名。だが、この部屋外に人の気配も無い為、退出は自由　　と解釈も出来る。

拘束はなさそうだ。油断は出来ないが。

「お初にお目にかかります。私は近衛詠春　　関西呪術協会の長を勤めさせて戴いてる者です」

物腰の軟らかさと、雰囲気。瘦躯ではあるが、清涼な佇まいと引き締まったその身体から剣を振るう者だと判断。

周りの者がややピリピリした空気を纏う中、対話の姿勢と涼風のように静かな空気は立場さえなければ好感が持てる。

「長自らとは光栄だ。

私はアーチャー。知っているとは思いがね」

長に対し、慚然とした態度に　　当の本人より、周りの数人の眉尻が上がる。

軽い挑発じみた物言いだが、さすがにこの程度で騒ぐ部下ではないらしい。無視はしないが、過剰な反応も無い為、これ以上の挑発的行為は裏目になる。少し態度を軟化させよう。

「有名ですよ。」

僅か数年で、日本のみとは言え『弓狗』と二つ名で呼ばれるまでには。

特に貴方は、ね」

持って回った言い回しだが

つまりはこうだ、『謎が多い』と。

出生や戦闘方は特に、と。

そして、それを切り口に話を進める以上、依頼とは刀剣鑑定ではない。つまり

「私に戦場に立て、と？」

「いいえ、違います。」

…貴方にはある依頼を『受領しない』と言う制限を請けて戴きたいのです」

思わず、眉尻が上がってしまう。それと同時に思い至るのは小太郎の依頼だ。

「……もしや、それは関東の娘子を拉致する、と言う話か？」

この言葉に流石に表情と空気が動く長。つまりは肯定、か。

「もしや、既にその依頼を？」

「いいや。“私は”その依頼は請けてはいない」

余程の懸念だったのだろう。今までとは違った射抜くような視線と、その声音。

そこへ即答で否定が来れば、誰もが訝し気に思うだろう。態勢を忘れてこちらを凝視する。

「……そうですか。」

それと、一つ訂正を。『関東の娘子』と言いましたが、その娘とは私の娘でもあるのです」

つまりは『関西呪術協会の長の娘』『関東魔法協会の孫娘』と言

う窮めて危険窮まりないポジション。

『……天秤のバランスどころか、そのものを壊しかねんぞ、小太郎よ』

両組織の長の直系を拉致とは　このところ多い幻痛も、もはやここまで来ると頭を抱え込む程の激痛だ。

その様子に近衛詠春も事情を察したのだろう、気遣いながらも敢えてそれを聞く。

「……それで、依頼の方は　」

「　　請けざるを得ないだろうよ。私の弟が既に依頼を請け、赴いてはいるが　」

小太郎は単に戦闘がしたいだけだろうし、女子供に好んで手を挙げる悪癖は無い。あくまで「拉致の邪魔をする者の相手」に留まるだろうから、ある意味安全ではある。

「……これは提案なのだが　」

近衛詠春は、あまりの展開に思考が止まってしまふ。

目の前の男、弓兵を名乗る生粋の戦闘者からの提事故、だ。

損得で言えば間違いなく“得”。

それも展開から言えば最良とも言える。

弓狗の内、狗は問題の一派が既に契約している為、最悪、行動制限を付ければ御の字　だった。

それを頸に強行派に枷を掛ければ良かった。

強行派でもかなりの小数　それこそ主犯は一人か二人と予測される程の人数。全く足が掴めない。

主犯は逆に言えばある意味特定は楽かも知れないが、あまりの人数の少なさから行動が読めない。

規模からみればただの嫌がらせに近い。

だが、思わぬ情報に内心驚きながらも少なからず『目標』はわかった。

『まさか娘の誘拐とは』

おそらく、アーチャーはこちらがそれを知っていると思い、気軽に いや、もしかしたら東西のバランスが崩れるのを未然に防ぐ為にバラした可能性もある。

どちらかは知らないが、目標が解れば対応は取れる。

『修学旅行』が目前故に、それを中止には出来ない。そもそも直前まで行動が知れなかったのだから致し方ない。

しかも、タイミング悪く今京都は主立った術者・神鳴流剣士が出払っており、強行派の助力が期待出来ないならば、総力からみて半減どころか更にその半分。

最悪、主要拠点の護りだけで、人員の派遣は不可能。関東も多岐に渡る修学旅行先に人員が割かれ、必要分しか派遣出来ない。旧知で信頼の置ける者だとタカミチとエヴァだが、タカミチは立場的に自由は効かない。エヴァはそもそも学園から出れない。

時間でもあれば、事が事だけに強行派も動かせただろうし、他の助力も得られただろうが……

限りなく悪い状況にあつてその提案は渡に船。弓狗が兄弟かそれに準ずる間柄なら期待出来ない提案だった。

「何を驚く？ 主犯が何を考えているか不明だが、東西のバランス処か計りそのものを壊しかねない状況で、私が“あの馬鹿”に手を貸すなど有り得ん。」

馬鹿には丁度良い薬だ、後で独房にでも容れて教育でもせねばな」提案とは『狗が請け負った依頼の達成妨害』だ。

思わぬ助力に思考が止まるのも致し方ない。正直、こちらからの提案を出しても受け入れられるかすら不明なのに、それより考え難い向こうからの提案。

「報酬は そうだな、事が解決した際に於ける我が弟への温情…… “ある程度の“身柄の保証でいい”

報酬もまた破格…… いや、それは雇われている事が端から分かっているからそう思うだけか。」

何も解らぬ状態では、立場は主犯と変わらぬのだから。

「それでよろしければ」

「いやなに、私もおそらく表立って行動出来んからな。

それと、何か書簡でも受け取るのかね？」

書簡？ 密書か。なるほど、敵の目標は二つか。

敵も分散化は避けられないだろうが、こちらはどっちが本命か解らない以上、既に後手に回るのは確定している。

それと「表立って行動出来ない」とは？

「先ず、敵は私達二人ではなく、片方だけを雇ったワケだが……おそらく、ただの目眩ましか楯程度の認識だろう。

依頼事態がどちら宛ても無かった。つまり、“名前”と“最低の能力”しか期待していない。

こちら、もしくはあちらが分散した場合、小太郎が居ない方が本命の可能性は高い」

可能性に過ぎないだろうが とは言うが、この状況で指針が出来るのは有り難い。

「それと、貴方の娘を先に保護は」

「それも考えましたが、娘は“こちら側”を知りません」

その答えに、むっ、と唸り考え込む弓兵。

考えていることは分かるが……

「貴方方親子の問題ではあるが……、いや、それならば尚更だ。もし、“こちら側”が知れた場合は？」

「……その時は、娘にも事情をお話しします」

「そうか。ならば、私も留意しよう。

今回、貴方々のテリトリーで“こちら側”の事件が起きようとしている。ならば、未然に防ぐ手段ではない方が後の為になるのではないかね？」

それは

つまり、

「娘“を”最後の贄”にしろ と？」

煮え返る程の怒りを覚え、それを隠すでもなく目の前の弓兵に向ける。

感情も無い秤に架けた考えなら ああ、それはあまりに効率的だ。

娘を餌に、調停書に血の印をしる。穿った話だが 確かに“効率的”だ。

大組織の存在維持に一人を贄にするやり方は、昔から在る政治手法ではある。

今回なら強行派の膿を取り除き、『既存の価値観の崩壊』を逆手に……それを威しに使う、と。極端ではあるが、そういう事。二大組織の長の血縁が危険なのだから、それを助長した者は責任を取れ。そう言われれば、不満があれど従うか 反るか。

反った場合は、多少の被害はあるだろうが、大義名分がある分、更には両組織の結託が確約されているのだ、完全な撲滅が可能だろう。

だが、それは

「 頷く事は出来ませんね」

黙する両名に、政治向きではない侍従達の困惑。

ただ真っ直ぐな剣士達は、長の拒絶に安堵し、娘を餌にしろと言う弓兵に険しい視線を注ぎ続ける。

そんな混沌とした場にて、吹き出すような短い笑いを以て沈黙を破ったのは、そもそも原因であった弓兵だった。

「ふっ……、やはり、だな」

「……何か、ご不満でも？」

張本人が“その態度”でいて、問われ、一人納得されては溜飲が下らないのが人だろう。

詠春の「不満でもあるのか」と言う問いは その実、詠春自身が不満だと言う証だ。

散々人をおちよくる様な態度を繰り返す弓兵に、長よりも先に周りの者達が切っ先を向けかねない。暗に「それを抑えるのが君だろ

う」と目と、皮肉気な口の歪みが訴えている。

ここで臣下を抑え切れねば、おそらく「今回の事件も、起きて当然だ」と 近しいものすら抑えられぬのだから、その外れは君の領分ではない、と。

そうなれば、彼は娘を贄にしかねない。だが、彼は「やはり」と言った。

既に、彼の中に解答があり、こちらの思惑を看破した上での問いであるなら

「私に何を望んでいるのですか？」

「いや、なに。望みと言う話ではないが……」

どのみち、今回は後手に回るのは致し方ない。私とて、直ぐさま君達と連携は採れないのだ。好きにやらせてもらえれば不満はないさ。

それに 「

遅かれ早かれ、娘に真実を告げる覚悟をしておけ

覚悟、とは。

確かに、もはや事は動き始めてしまっている。

弓兵の言う通り、後手に回る以上、娘の視野がこちら側に入る可能性は高い。寧ろ、何も知らずに解決することこそ幸運がどれだけ続けば良いか……

そして、それを前提に弓兵は事を進めるのだろつ。ある程度の危険すら度外視して、“目標”を燦り出すに違いない。

弓、狗 2（後書き）

前話に繋げても良かったけど、場面が急に変わるから切りました。
そして、ストックはこれで終わり。
次はいつ掲載か全く不明。

そして、潤い（おんなのこ）成分が補充されるのも不明。

青年／中年組は安定軌道に乗ったけど、少年少女は安定性に欠けますね。出番的に。

小太郎、頑張れよ。君が今、一番香ばしい（おんなのこ）香りに近い。

そうだ、小太郎……俺達の戦いは、まだまだこれからだぜっ！

先生の次回作にご期待（ry

ヒトは 求める

置いたままの受話器に手を添え、暫し睨むようにその手を見詰める男が居る。

近衛詠春。男の名だ。

何か考え込んでいるのか、睨み続けること数秒。そして、今度は目を瞑り、顔を上げ数秒。

ゆっくりと、ゆっくりと、ゆっくりと

小さく隙間を作った唇から吐息。顔を下げながら吐き続ける。

やがて吐き終え、目を見開き、空いた手でボタンを押し始めた。

短縮を使っている為か、ほんの数回の入力で呼び出し音がなり始める。

ある種の儀式的な雰囲気すら感じる、その段階を踏んだ行動。そこに意味が在るとして それは何なのか。

『ヒト、と云うのは、徒に意味を求めがちですね』

僅か数コール。そんな事を考えながら、相手を待っていた。

学園長室に鳴り響いた電話の呼び出し音。それを数回で止めたのは、やはり部屋の名を冠する者だった。

慌てず、確りと持った受話器を耳に充て、その唖れた声を吐く。

「儂じゃ」

酷く端的で、ある意味横暴。この場に掛けた以上、電話に出る者は誰だか知っていよう、と。そんな独り善がりにも聞こえる台詞だが、彼はそれだけの地位もある。

その短い切り出しに不満も無いのか、会話のやり取りはスムーズだった。

ふむ。そうか。ほうほう。

そんな頷き声を発しながら相づちを数回。そこで瞳を隠さんとは

りに蓄えた眉が、片方上がる。

「ほ……なんと、それは重畳。」

……して、信用は出来るかの？」

その会話を意図せず聴いてきた者達も、そこで学園長の雰囲気が変わったのを感じた。

「……そうか、いや、良い良い。」

婿殿が気に病むこともあるまい。

取り敢えずの指針が得られただけでも御の字。苦勞を掛けてすまんの」

硬い雰囲気から、相手を氣遣うような流れへ。

幸の中に不幸、不幸の中に幸があったような。平を知らず、波打ち際のように訪っては返すような。丸く納めたいのに、方を叩けば、対が出るような。

結果を見れば、可もなく不可も無いのに、その過程は歪。そんな会話が あったのだろう。

「……では、の。そちらは任せたぞい」

そう、言葉で締めて受話器を置く。

背もたれに深く背を預けると、若干上を向いた顔に疲れを乗せて、溜め息を溢す。

どうやら、話は平坦に終わらなかったらしい。どちらかと謂えば考えるまでもなく、その表情が物語っていた。

暫しの沈黙。それを破るのは一人の少女だった。

「あの……それで、先程の電話は」

少女 刹那 は、今の会話が誰と何の話か半ば承知で、問い……と言うより確認を込めて尋ねた。

「刹那君の想像通り、婿殿からじゃ」

ゆつくり体を起こすと、両肘を机に着き、組んだ手の甲に顎を乗せて応える。

「どうやら弓狗の内、弓を引き抜くことに成功したようじゃ」
その言葉に学園長以外が驚きを表す。

それもそうだろう。先程までその弓について難儀していたのだから。

これは正に吉報。問題の中で頭を悩ませていた者が、中立を越えて此方側に転がって来た。

だが、それでは先程の学園長が溜め息を吐いた理由も、疲れた表情も説明がつかない。

そこには何か、吉報に対する負の要因が在る筈だった。

そこで何かに思い当たったのか、龍宮が問う。

「先程『弓は』と言ったね？　と言うことは、狗は」

「そうじゃ、察しの通り。正に渦中じゃ。」

動きのある一派に雇われておる」

それは、つまり。

「……確実に妨害が来る、と言うことが確定したわけか」

それは、確かに吉を打ち消す話か。

だが、それでは計りは中で止まる。傾きが無い。なら、さらに何かの重石が在る筈だった。

「ま、さか」

そう言葉を発したのは刹那。

目を見開き、虚ろに宙を見る。その顔色は蒼白だ。

彼女にとって、その想像は最低最悪。否定したい。否定して欲しい。

定まらない視線で、漸く焦点を合わせた瞳に映る老人。その口から否定を欲していた。

学園長も、その様子から察したのだろう。短く息を吐き出し、告げる。

「……刹那君の、思っておる通りじゃ。

貴奴等は儂の孫を拐うつもりらしい。

……しかも、それを」

贅にするつもりじゃ

一瞬、刹那は全てを無くした。

視界は無へ。周りの音も聴こえず、心臓は鼓動を忘れた。思考なんて何一つ無く 理性を以て動くヒトで在ることすら放棄した。

刹那、その名の通り、瞬きの時程に僅な間だが 全てを無くした。

視界に色が戻り、自身の荒い息と早鐘の鼓動を聴き、知らず知らずに抑える胸は、締め付けられたような痛みを訴え続けた。

思考を占めるのは、何よりも大切な幼なじみの笑顔。それを頼りに、漸く 担任の教諭が肩に手を置き、こちらを心配気に見詰めるのを知覚するまでには 幾らかの平常心を取り戻した。

人が去った学園長室で、老人は深く腰掛けた椅子にて目を瞑る。

ここに来ていた三名が退出してから、半時は経っていた。

その半時。彼はただただ思考の海に居た。

嬪殿との会話。刹那達との会話。

立場故に、明確な決断をした。

詠春からの情報で、一番重要なのは孫娘のこと。

爺として、可愛い孫娘を危険な目に遭わせたくは無い。だが、その為に他の何も知らぬ一般人を巻き込むのは筋違いだ。

ましてや立場故に、『高々孫娘一人の為に』全てを棒に振るような真似は出来ない。

修学旅行を中止にする？

否

孫娘を差出、都に惨事を齎す？

断じて否

比重は孫に傾いている筈なのに、状況はそれを覆す。

目前に迫った修学旅行を中止にする大義も無く、時間すら無い。

そして、よりによって”助力まで付いてしまった”。

孫を護れる手段が増えた為に、孫娘だけを此方に置く理由すら失った。

敵の規模は明らかに少ないだろうし、親書を以て和睦を成す為に英雄の息子すら動かした。

好転している筈なのに、そのせいでいつの間にか進む道は前にしか無くなってしまっていた。

脇道も、帰り道も無い。一番安全な道は疾うに自分達で埋めてしまったのだ。利害の無い、極めて平坦な道は。

在るのは、見た目が危険な吊り橋か。渡りきれば、そこには絶景が待っているような。

東西の和睦と、英雄の息子へ旅の指針を。修学旅行はまだあどけない少女達に、大切な想い出を。

そうして得られる利潤と、算定する敵の規模。そこだけ見れば、難易度の低さから逸る理由はない。ただし、失敗した時の害悪だけが一等目につく。

「それさえ無ければのう。」

儂も悩まんで済むのじゃが」

だからこそ、詠春を通して語られる弓の話に悩む。

向こうが孫を贄とするなら、それよりも早く此方が贄としろ。そう言うことだ。

木乃香の生い立ち故に、普段なら逆に手は出せない。その禁すら破る以上、最早二の次は無く、敵は失敗すら見ていない。在るのは配当金を掴む自身の姿だけだろう。

そんな膿を取り除く手段に木乃香を使う。

効率的なそれは、かと言って納得出来るものではない。

事実、詠春は拒絶した。自身も問われれば拒絶する。

「そうして残された道は、たった一つとはの」

結局、どんなに悩んでも、親書を守って木乃香も護る、たつたそれだけ。

敵が不退転なら此方も不退転でそれに挑むしか無い。

ただ、祖父としては、微かでも危険がある所に行かせたくなかった。組織の長として決断しながら、個人としては未だにそんな決断を悩み、悔やんでいる。

翁は月を眺める。真円に為れず、どこか欠けた月を。

月は翁を照らす。意を決した筈の、どこか欠けた翁を。

互いに、最後の一片が足りない、似た者同士。

だが、その実 決定的に違うモノがある。

時と共に真円を取り戻す月と、何かを溢しながら足掻くヒト。

そうしてヒトは、溢した何かに意味を求める。

「ヒト、と云うのは、徒に意味を求めがちじゃの」

僅かに、自嘲の笑みを作りながら、ただ月を眺めていた

ヒトは 求める（後書き）

本当は爺側じゃなくて、親父側の方で話進める予定でした。お陰でなんだが良く分からない話になってしまった。

電話での会話が不明なのは仕様です。

全て答えを啓示するようなのは、読者の飽きたかなー……なんて勝手に思ったが最後、こんな推理小説ばりに謎しか残してません。ま、たまにはこんな書き方もアリでしょう。

何でも解説君とかウザイし。でもそれ以上にクドイ文章だし。小太郎出ねえし。ダメだな、この回。

そしてやったぜ刹那。君は頑張った。親父と爺の間に潤い（おんなのこ）成分運んだよ！全然萌え要素無かったけどな！

あー、そして最後の方で失敗したかなー。

書いてるうちに、本来書きたかったことから微妙にズレて、修正してるうちにあんなになった。

余談ですが、月下老人と言う言葉があります。最後のシーン書いてる時に思い出した。全然シーンに合わない意味ですがw

弓、狗3

小太郎は夢を見ている。

今より幾分幼い頃、何度か士郎を説得し、漸く鍛練に付き合つて貰った。

強さに拘りを持つ故に、身近に強い相手が居れば当然その強さに追い付きたく思うモノ。

そうして半年も鍛練を続けたある日、小太郎は一つの疑問を口にした。

「どないしても勝てん相手に勝つにはどないしたらえんや？」

まだまだ幼い故に、何処か文法が間違つた言葉だが、その意はちゃんと通じたらしい。

「それには先ず自身に負けない事だ」

……訂正。通じていなかったらしい。

小太郎は相手に勝つ方法が知りたかつたのだ。そんな相手の無い自分なんて見えないモノに勝つことなど出来ない。

「それは間違いだ。目に見えないからと言っている時点で己に負けている。

そして、自分自身に勝つことなど出来ない」

全く以て意味不明だった。

幼い自分にそんな哲学じみた事を言つて、理解が出来ると思っていたのだろうか？

それに『負けない』は『勝つ』とは違うのか？

「大いに違う。

いいか小太郎。イメージするのは、常に最強の自分だ。

そこに妥協は無く、僅な狂いも赦されない。

最強で在るが故に勝てず、己で在るが故に負ける事は赦されない」

今は分からなくとも、必ず覚えておけ　そう云われ、必至に記憶した。だから今でもこうして夢に見る。

分からないなりに、それは大切なことだと思った。何れそれが解ったなら、それはきつと自分は土郎と同じ所に至った時だろう。

今は分からない、だから質問を変えてみた。

「なら、兄ちゃんが勝てん相手って居るん？」

「それは無意味な質問だ。何故なら」

ああ、やっぱり無意味か。それほど強ければ負け知らずなのだろう……そう、思っていた。だからそれはあまりに予想外。呆けた自分が、その時どんな事をして、何を考えていたのか全く記憶に無い。もしかしたら何もしていなかったかも知れないし、何も考えてなかったかも知れない。

何せ、彼はこう言ったのだから。

私は誰にでも負ける可能性が在るからだ

その時の小太郎は間違いなく混乱の極みにあった。自身にとって、強さの権現とも言えたヒトの言葉とは思えないからだ。

只でさえ意味不明な問答の後、一度も勝てない相手に『誰にでも負ける』などと言われて納得出来る訳も無し。

イマイチ思い出せないが、本気で喰って掛かった気がする。

「そうだな、単純なスペックで言ったら私は小太郎にも勝てない。強化しても獣化されたら筋力で勝てない、単純なスピードで勝てない、気も使えず才能も無い」

淡々とした言葉に、小太郎も頭が冷えて行く。確かに……と、その言葉を肯定する自分が居た。

それと同時に疑問が湧く。それでも自分は勝てた事がない、と。「それはそうだ。私はお前にソレをさせないのだから。

いいか小太郎。いくら力があっても当たらなければ意味はない。スピードがあっても来る方向が判れば対処は楽だ。気が使えないからと云って、態々同じモノを求める必要性も無い。

“勝てない”なら“負けない”何かを創り出せ。決して相手より

劣った部分で戦うな」

言われて不満顔をしていた小太郎。何と無く、それは卑怯な気がして納得出来ないでいた。

だが、その一方で何と無く理解はしていた。確かに、土郎はそんな戦い方だったから。自分のやりたい事を、勝てる手札を出させない。或いは当てさせない。

最初から結果が分かっていた阿弥陀籤。最初に選べる選択肢は多いのに、辿って行く過程は流れに沿ったまま。行き着く先は自分には見えていないのに、それを作った相手は最初から結果が判っている。

新しい技と言う線を書き込んでも、それを最初に書き込んでしまったら結果は判っている。

だから勝てるとしたら、流れの途中で線を書き込む反則しか無い。則ち“閃き”。

「そうだ。才能とは、有り体に云って閃きだ。

苦しい状況で、新しい“何か”を生み出せる者を天才と言う。

……その点で言えば、小太郎……お前は間違いなく天才だよ」

予想外の方向から褒められた為に、またしても呆ける小太郎。それでも、閃きで勝てないなら　やはり納得出来るモノではない。

そこで思う。閃きと言う反則で勝てないなら、土郎も天才ではないか、と。

「それこそまさか、だ。

私は才能と言うモノを片っ端から欠如している。そもそも、私は戦いに関しては何ら勝るモノを以ていないのだ。

閃きなど無いし、出来るのは既に裡に在るイメージを形作ること。端的に云って、私は剣だ。

相手を傷付けることは出来るが、それだけ。その剣を持って技を生み出すことは出来ない。担い手ではない故に、既に剣として象在る私はそれを使いこなせない。

仮に私が剣を持ったとして、所詮二流。何処まで行っても一流に

至れない。誰にも出来ない特別は無いが、誰にでも出来る普通は極める事は出来る。二流なら二流らしく、その二流を極める。

そうして出来た二流の極み。それが一つではなく、自身が持てるものの全てなら？」

『そら勝てんわ』

先程と違い、何処か呆れ顔で納得。結局、何一つ派手さも無い淡々とした行程で倒された自分。その実、ただ自分が不利なまま何も出来ずにいただけ。結果を変えようと必死に閃いた技も、余程予想外のモノでなければ既にある二流の極みに止められる。

斬るなら斬る。突くなら突く。それらを繰り返し窮めた。

歌いながら踊れないなら、せめて歌うことを極めようとした歌い手に、出来るからと云って歌いながら踊っても、派手なだけで勝てることはない。何れ歌いながら踊れるモノは、歌うことしか出来ないモノを超えることは目に見えても 少なくとも今は勝てはしない。

つまり、小太郎が勝つには相手が出来ないことで勝るしかない。

それを卑怯だと思うなら、その才を以て凌駕するしかなく 結局の所、才能を開花させただけでなく、その才能を伸ばさねば為らないなら どのみち “今は” 勝てない。

「そうだ。所詮私は “負けない” だけだ。

元より、私は戦う者ではない。現に、身体的なスペックで負けている。

それに、私の用いる切札ですら、“既に存在していたモノ” のイメージを形象化するだけ。それを強化しても、その存在に定着した意義は変化しない。変化を促しても、只見た目が変わるだけ。力を注いでも、容れ物の許容が知れている。

気や魔力を捏ね回し、違った新しい何かを生み出す事など出来はしない。一点に収束し、力を高める事すら出来ない。

違う何かを混ぜることも、掛け合わせてより大きくすることも出来ない」

黙くして話を聞き、小太郎は必死に考える。

これはとても大切なこと。今は理解出来ないかも知れないが、決して忘れるなと本能が告げる。

所詮それは士郎のことかも知れないが、それを識ることが間違はなく自分の力になる。そんな予感。

自分は才能がある。らしい。

士郎の出来ない狗神を使い、気も使える。獣化もまだまだ伸び代があるし、分身だって使える。

『なんや、まだやること仰山さんあるやんか』

確かに今は勝てないが、何時か絶対に勝てる時が来る。そう思えた。

なら、これからも閃きを繰り返し、閃きを極めるだけ。もし、一流になれるモノを見付けたら、二流の辿り着けない極みに至る。

それが目標。それが最強の自分。

「その目標、それに至る過程こそが己の敵だ。

極みを知らず、最強をイメージ出来なくなる時は必ず来る。

その時、己に負けてはいけない。勝てなくとも、負けなければ自と結果は見えてくる」 まだ半分も理解出来ないが、何と無く

そう、何と無く、心に染みるとでも云うのか。漠然と謂わんとすることが分かった。

きつと、もつと簡単な言葉があつただろう。それでも、長く詞を重ねて、重ねて、裡にある想いを説き続けたこと自体に意味がある。なら、自分に出来ることは忘れないこと。少しずつ詞を解き続ける為に、その詞は忘れてはいけない。

「なんや、長い話し聞いたら眠なってきたわ」

「そうか。なら、ゆっくり眠るが良い。焦ることは無い。まだまだ先は長いのだからな」

そう言つて微笑む“兄”の姿を見ながら、酷く疲れた身体は心地好い安らぎに充たされていた。

「小太郎はん。こないなところで寝とつたら風邪引くえ」

そんな若い女性の声が間近に聞こえ、懐かしい記憶が映した夢から褪める。

薄らと開けた視界に眩い陽光が入り、思わず開いた瞼を綴じてしまふ。陽光を遮る様に左の腕を翳しながら、再び瞼を開くとそこには最近見知った顔があった。

眼鏡を掛けた少女。服装のセンスは小太郎に理解出来ない、やたらフリフリの多いモノ。そのくせ、神鳴流とか言う武闘の流派の門弟で、実力もかなりのもの。

見た目と中身が色々違う。そんな仕事仲間だ。

「おー、月詠やか。なんや、俺寝てもーたんか」

月詠は何が楽しいのかニコニコしている。

いや、何時もニコニコとしているが、表情だけでなくこう…

…気持的に悦んでいるような。

「ええわゝ。小太郎はん、寝顔がえろう可愛えおすな」

可愛い、と言われて男として納得いかない。男ならカッコイイ。これだ。

ムスツとした顔をしながら、完全に覚めた思考である疑問に行き着く。

「……なんでこんなとこ居んねん」

そう、自分は鍛練出来る場所をと雇主の千草と言う女性に聞き、京に数在る神仏の社から、小さな山頂の寂れた神社に居た。

とてもではないが、好き好んでこんな場所に来る輩は居ない。

千草から人払いの符を貰って貼り付けた為に尚更だ。

「小太郎はんと試合つか思て」

その小太郎の疑問に、然も当然とばかりに即答。

相変わらずニコニコしている月詠に、先に折れたのは小太郎。どうせ一人の鍛練では限界があるし、手合わせを拒否する理由もないわかった。おおきに。と短いやりとりで起き掛けの予定は決まっ

た。

場所も移す必用も無いので、そのまま境内の中心まで歩いて構え。月詠も小太刀を両手に構える。得物は刃だが、小太郎は気にも止めない。それに、二刀流は小太郎の臨む所でもある。

何時も攻略出来ない二刀使いに対する予行練習。そんな気軽な気持が無いでもない。

そんなやる気満々の小太郎に、笑顔の質を変えながら、より一層笑みを濃くする月詠。本来女子供に手を上げない小太郎ではあるが、月詠の実力から本気で掛かっても良い気はしている。それに、別に殴って敗けを認めさせる必用も無い。自分が“負けなければ良い”のだから。

「ほな、始めますえ」

「何時でも来い」

その後、段々波に乗って行く二人に横槍が入る。表情の読めないと言つより無表情な仕事仲間の少年。その少年から雇主から呼び出しがある、と告げられて。

不完全燃焼故、渋々ではあるが雇主の元へ戻る。

そう、漸く、“仕事”が始まるのだ

弓、狗3（後書き）

漸く小太郎主人公タイム。

……月詠との戦闘？ 書く？ 書き直す？

つてかおんなのこまた出た。

自分でも予定外。予想外では無かったけど。

で、月詠の戦いはまだまだこれからです。月詠先生の次回作に「期
t（ry

……つてか、ホント需要あんだるか、この作品

弓、狗4（前書き）

期待してないと思うけど、みんなお待ち。
場面超跳ぶけど気にしないで。

先に言ってオキマス。超短いです。

弓、狗 4

それはいつのことか……

小太郎にとつての日常。軽い言い合いからちよつと手が出て、そのままちよつとした兄弟喧嘩。

そんな時ばかりは何時にも増して憎つたらしい笑みを見せる兄。そして結局勝てなくて、それでいて何故か楽しい想い出に変わるそんな日常、その幾つかの内の一つ。

他愛もない殴り合いで、互いの身体強化の違いに気付いた時だ。

小太郎が気で、土郎が魔力……なんて単純なモノじゃない。互いに裡からの強化だが、一点、違うモノを見付けた。

言うなれば強化の過程なんて判り辛いモノではなく、最終的にどんなカタチになったか、である。

気も魔力も、結果的に見れば「身体に纏う」事で見えない鎧を着込むようなものだ。

だが、土郎は「身体そのもの」を強化する。簡単に言えば「存在そのものの強化」だろうか。

紙が堅さだけ石のようになったり、砂糖の甘さがより際立つたり。つまりそう言うことだ。

例えば、小太郎が速く走ろうとするなら、ジェット機のように推進力を気に喻え、その推力で加速する。これは西洋の魔法使い達も変わらない、専ら『舜動術』などと呼ばれる技に繋がる。

これに対し、土郎は『肉体そのものを強化』することで、その脚力を以て加速する。

これに気付いた時に、少し真似しようと思いはしたが、そもそものやり方が分らず断念。だが、そこで新たな発見もあった。

確かに、存在の強化をすれば、断続的に細かい肉体の稼働をするには向いている。踏ん張りも効くし、衝撃緩和や筋力強化による過重量への耐性も出る。

だが、瞬発的な加速や一点に集中しての最大値の増加は得られない。分かりやすく言うなら、川辺を超えるのに水中を泳ぐのか、はたまた水面に浮かぶのかそもそもそれを跳んで超えるのか。何が水中で何が他かは言うまでもないだろう。

自分は水面に浮かぶか跳べるが、士郎は水中を泳ぐ為の強化しか出来ないのである。

しかし、それも欠点ばかりでもない。存在強化とも言うべきソレは、何も自身ばかりが対象ではない。他者の強化は出来ないらしいが（少なくとも士郎にとっては）無機物などの強化は実際にしていた。

まあ、本来無手の小太郎には要らぬ技能だが、それは小太郎に出来ないが故に羨ましく思う。

それを言ったらこう返された。

「出来ぬことを羨むくらいなら、出来ることで凌駕してみろ」

それは至極当たり前のことだが、然れど難しい。

気付かぬうちなら単に優劣を着けるに難くない。だが、気付けばその在り方の違いに何を以て優劣を着けるのか……と少しは考えたが、額面通りに『凌駕』すれば良い。最終的に勝てれば良いのだ。

と言ったら怒るだろうか？

と考えていた。

「ふむ。何を考えていたか察しがつくな。どうせ小言でも言われると警戒しているようだが」

それで当たりだ

その時の自分は余程呆けていたのか、嫌味を忘れ、声まで殺して笑う姿に思わず手が出たものだ。

「俺こそ『そのクチ』だよ。」

何にでも劣る自分が、それでも勝てる何かを造らなきゃダメだった。

速さに追い付けないなら、置いていかれない状況を作る。能力で勝てないなら、能力に代わる何かを持つてくる。普及しているモノ

で劣るなら、誰も知らない自分で勝てば良い」
常に厳つい表情が解け、子供じみた顔で言った言葉を覚えてる。
覚えてる

「……目は覚めたか？ 小太郎」

起き抜けの一声に、意識がはつきりして来た。

同じ年頃の、見下してもいた西洋魔法使い。その少年に破れ、気を失って そのまま夢に落ちたらしい。

ボヤけた視界の端に、特徴的な白髪を見付けた。何故ここに居るか分からないが、仰向けに大の字で転がる自分に軟らかな布地が掛けられているのを知覚する。自身の体温と異な暖かさを感じるに、そう時間も経っていないのだろう。何が、かは推して知るべし。

「……負けた」

自分でも分からないが、口からは言葉が溢れてしまっていた。しかも、止められない。

「おんなじくらいの西洋モンでな？ 弱かったんよ」

「……そうか」

少しの間を置いて、淡々と返事が返って来た。

だから、と言うわけではないが、もう言葉が洩れるのを止めようとは思わない。

「魔力ばつかあっても、戦い方も知らんガキでな？ 強化も出来んし、仲間の姉ちゃんのが強いくらいやったわ」

静かに聞く土郎から、何も言わないのに言葉が聞こえた気がした。「それで」と続きを促しているような、そんな感じた。

何も言わない、だが、確実に話は聞いていると確信を以て応える。語るに連れ、気が楽になってきて、知らず知らず、口元は綻んでいた。

「でもな、アイツ、土壇場で強化したんよ。」

強化言っても無理繰りやったような出鱈目なヤツや。強化なんて

珍しくもない。

でも……でもな？」

不思議と可笑しくなって笑う。気が抜けて、堪えたモノも瞼の裡から零れさせて。

「アイツにとってはオリジナルだったんや。何も知らんで、それでも俺に勝てる『何が』を見付けて

アイツ、俺を殴った」

初めての経験だった。負ける要素が無いと思ってた相手に負けて、無性に悔しいのに 何故か嬉しくもある。

上ばかり見上げて、強くなる為により強い者と戦うのが一番だと思っていた。

そうしたら出会ってしまった。直ぐ側に自分を超えて行こうとする、自分と同じ上を見上げる者と。

手を抜いたら直ぐに追い越されてしまう。そんな恐怖感とそれ故に生まれる競争心。

今までは「何れ勝つ」と云う目標が先にあっただけ。だが、これからは「負けたくない」相手が出来た。

それを想うと心が奮えて堪らない。

笑みは濃くなり、零れる雫も増えて行く。

「天才……って、ああいうヤツのことなんやろな」

「……それで、お前は諦めるのか？」

天才に負けて、それで終わりか？」

滲む視界では、その表情は判らない。だが、声で判る。それは「何時も通り」の皮肉気な笑みに違いない。

「ぬかせ！ 次勝ちやイーブン、次も勝てば勝ち越しや！

次は負けん。ネギに出来て俺に出来んワケないやろ」

「ふむ。なら、お前に出来ることはその子にも出来るのではないか？」

もしくはお前に出来ないことを出来るかも知れん」

”何時も” この男はこうだ。こんな聞けば頭に来るような物言い

で、それでもその言葉の裏に違う想いを乗せて。

「上等……ッ！ それでこそ遣り甲斐があるっちゅーモンや！」

仰向けに寝ながら右の拳を天に突き出す。

狼煙代わりの拳の先に、何かを見付けたのか　それとも何かを映しているのか。じつと天を見詰める小太郎を満足げに見詰め、静かに土郎は去って行く。

シンボルでもある、その紅の外套を小太郎に預け、一度も振り返らず　いつの間にか夕闇に紛れ消えていた。

弓、狗4（後書き）

本当はモット長い予定だったのに、ブランク故か文章が思い浮かばぬ。

場面的に丁度切り替わるから、続きはまたの機会。

内容的にはよくあるスポコンのノリ。

やっぱ小太郎は主人公適正ネギよりあるよ！

ヒロインは……

……くぎみーでおながいしま

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2840o/>

弓の軌跡、孤独な狗

2011年2月23日00時31分発行